

日本機能水学会第18回学術大会 大会長挨拶

テーマ：明日の暮らしに役立つ機能水

大会長 錦 善則

(デノラ・ペルメレック株式会社 技術アドバイザー、学会誌担当役員)

第18回目を迎える本大会は、2012年より参画いたしております日本医療・環境オゾン学会に大会運営の委嘱があり、その分科会であるオゾン水研究会がお引き受けし、同オゾン学会事務局のある大阪にて開催することになりました。

機能水の多くは電解プロセスにより製造されています。電気エネルギーを用いて化学物質を生産する電気分解（電解）プロセスが実用化に至ったのは約150年前であり、日本がリードする大規模イオン交換膜型電解セル(数10ton/h)を用いて、国内塩素生産量は350万トン/年に達していて、その中で次亜塩素酸ソーダ生産量は4%程度に相当します。また、薬剤としての供給が困難な地域では、より小規模の数100g/hから数10kg/h規模の次亜塩素酸ソーダのオンサイト製造装置が利用され、上記と同程度の生産量があります。

さて、本学会に関連する数10g/h規模の小型オンサイト装置は、恐らく上記次亜塩素酸ソーダ製造の1%に満たない生産量であると推察されますが、まだまだ社会に貢献できる余地があるといえます。その理由として、国内の電力源が原子力から再生可能エネルギーへと移り、電力の自由化が進行する中、住宅・地域規模での自立・分散型社会の確立が期待されています。また、大きな自然災害をいくつも経験したことで、危機的な状況においても衛生的・健康的な暮らしを守るには、従来のライフラインでは満足すべきでないことに気づきました。そして、快適なくらしのために、身近なくらしに潜んでいる環境問題・衛生的課題に対して提案される新しい装置・習慣・価値が、円滑に受容される時代が来ていると感じるからです。

本大会テーマとして「明日の暮らしに役立つ機能水」を掲げました。このような変遷を迎える社会において、利便性・安全性を担保した小型の機能水装置は、有望なビジネス素材であると位置付けることができます。日本を代表するビジネスの中心地・大阪で、機能水の活躍する豊かな未来を見出せるのではないのでしょうか。

本大会におきましてもこれまで同様に、各種産業・医療分野において活躍されている会員各位より、有益かつ実践的な報告のあることを大いに期待しております。

錦 善則